様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　５月　２１日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）

研究期間：2006～2008

課題番号：１８７２０１２１

研究課題名（和文）　詞章流動期狂言資料による複合辞形式の研究－近代語の分析的傾向

研究課題名（英文）　Research on the compound word form by analysing the scripts of traditional comic play written before their words were fixed

研究代表者　松尾　弘徳（MATSUO　HIRONORI）

九州大学・大学院人文科学研究院・専門研究員

研究者番号：４０４２３５７９

研究成果の概要：

本研究課題にて特に重点的に研究を行ったのは、福岡市方言の「ゲナ」という形式である。「伝聞の助動詞からとりたて詞的用法へ」という文法化現象が主に福岡県筑前西北域の若年層に見られ、方言文法研究において興味深い事例であると考えられる。この研究に関する口頭発表を数回に亘って行い、学術論文にまとめた。

また、これと並行して狂言資料による日本語文法史研究も行い、因由形式の階層構造に関する論文をまとめた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	300,000	3,100,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語文法史、近代語、狂言資料、方言文法、ゲナ、因由形式

１．研究開始当初の背景

「複合辞形式による分析的傾向」は古代語から近代語へ至る流れの中での大きな変化である。現代語の「することができる」「ないつもりだ」など複合辞による表現形式は、いくつかの自立語がひとまとまりとなってモダリティ形式を形成している。このような複合形式による表現形式の形成過程の考察が本研究の全体構想であった。

これを解明するために、近世初期筆録の狂言資料を用いた点が本研究の特色と言える。研究開始の段階においては、本研究が主な調査対象資料とした天理図書館蔵『狂言六義』は十分な研究が行われてきたとは言い難く、この資料の資料性の解明およびそこに反映している言語事象の究明を行う必要があった。

その上で本節冒頭に掲げた複合辞形式が形成されてゆくという古代語から近代語への変化の過程を、当該期の狂言資料並びにその他の口語資料を用いて究明することを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は下のようにいくつかの項目にまとめられる。

(1) 「複合辞形式による分析的傾向」は古代語から近代語へ至る流れの中での大きな変化であること、１．で述べたとおりである。これら複合辞の一つに当為表現形式が挙げられる。当為表現とは現代語において「～なければならない」「～ないといけない」などの形式で表される、義務を表す表現を指す。

これはかつて古代語の「べし」が担っていた意味範疇の一部が切り取られ、現代語では「ない＋ければ＋なる＋ない」という、いくつかの語が複合した形式、つまり複合辞形式で表現されるに至ったものである。この当為表現形式が形成される兆しが近世初期筆録の狂言台本に見えることから、この様相を明らかにする。

具体的に述べると、近世期の狂言資料にみえるナル系当為表現（e.g.～なければならぬ）とカナウ系当為表現（e.g.～いでかなはぬ）の２つの当為表現形式間の質的相違は、現代語も含めた当為表現一般の用法変遷の類型にも還元できるのではないか、と考えられるところがある。このように、新しい形式がそれまでの形式に取ってかわる際の、両用法の役割分担がいかなるものであったということに重点を置いた。これは、単なる形式交替の指摘にとどまらない、言語の本質的な問題に関わると思われる。

(2) 天理図書館蔵『狂言六義』（以下天理本）という資料は、筆跡鑑定により筆録者複数説が唱えられており、しかも言語事象においても上下巻、あるいは巻途中での内部差が見られる特異な資料である。

私はこのような詞章が固定していない天理本のような狂言資料にこそ、日本語の推移を見てとることができるのではないかと考える。いくつかの文法項目の中でも特に因由形式（現代語の「から」「ので」にあたる、原因理由を表す条件表現形式）に着目し、研究を行う。

因由形式の用例総数および上下各巻における内部差の状況をこれまでの研究において明らかにできていたため、その様相をさらに詳しく調査することをめざし、因由形式間の包含関係に着目する。天理本の包含関係を虎明本など同時期に筆録されたとされるその他の狂言台本の様相と比較することで何が見えるかを論じる。

(3) 共通語の影響で全国的に方言差が縮まってきている一方で、若い世代が新たに使用するようになった方言語形が存在することが近年指摘されている。それらは「新方言」などと呼ばれ、各地域における具体例の紹介もなされてきている。

そのような新方言の福岡における一例とされる表現に、「数学げな嫌い。」に見られるような「ゲナ」というものがある。このゲナの現在の福岡方言における分布状況、および新方言として成立するに至った過程を明らかにする。特に後者の成立過程の考察に主眼をおいて論じる。この研究のためには、若い世代がゲナをどのように使用するかを調べ、それよりの上の世代のゲナの使用状況と比較する必要がある。

その上で、福岡方言のゲナにどのような変化が生じているかを考えてみる。

３．研究の方法

１．で述べたように、「複合形式による表現形式の形成過程の考察」が本研究の全体構想である。これを解明するために、近世初期筆録の狂言資料を用いる点が本研究の特色であったと言える。

室町末～江戸初期の台本の詞章は、即興劇として成立した狂言が台本の形で書き留められたごく初期であり、詞章としては流動的で当代の口語をよく反映しているものと考えられる。特に狂言資料に着目する所以である。

このような見地に立ち、狂言資料の中でも筆録者が明らかでないためにあまり研究が進められていなかった天理図書館蔵『狂言六義』（近世初期筆録の和泉流狂言台本）に着目し研究を行うという方法をとった。資料が内包する資料性の問題も加味しながら、そこに反映した言語事象はいかなるものであるのかという点に重点を置いて研究を行った。

わたしは天理本をはじめとする、詞章部分が固定しておらず、それゆえに日本語史において重要な問題を提起するような狂言台本を「詞章流動期狂言資料」と名付けた。そして、この詞章流動期狂言資料をもとにしたいくつかの文法項目の調査を行ってきた。

上記の研究と並行して、日本語文法史および言語学の知見を生かして福岡方言の「げな」を取り上げ、研究を進めた。この「げな」は、４．(2)で述べるように、現代方言における文法変化の一事例として非常におもしろい問題を含んでいるためである。

４．研究成果

以下に今課題の研究期間中の成果を記す。

(1) 天理図書館蔵『狂言六義』（以下天理本）の原因・理由を表す主要な形式はホドニとニヨッテの２つである。この原因・理由を表す形式の包含関係に着目し、因由形式の構文的分析を行った。

複数の因由形式が包み含まれるという関係にある文を調査したところ、「ホドニはニヨッテを包含するが、ニヨッテはホドニを包含しない」という階層性が天理本に見られることがわかった。このホドニとニヨッテの包含関係に関する階層性は、大蔵虎明本の調査からも窺える事実であり、しかもニヨッテの使用率の高くなる天理本下巻部分でもこれは守られている。つまり、天理本では上巻と下巻では因由形式の様相が異なっている（ホドニ優勢からニヨッテ伸長へ）にもかかわらず、「因由形式間の包含関係」という質的関係は維持されていることになる。

虎明本などと同様の因由形式の階層性が天理本に一貫して見られるということは、構文的にも当代の因由形式の様相とは齟齬をきたしていないということである。とすると、天理本の因由形式の様相は当代の口語の反映とみて差し支えなく、「天理本筆録当時（これは虎明本の筆録時期とほぼ重なる）、ホドニの衰退・ニヨッテの伸長はかなり進んでいた」という指摘を、構文的見地からも補強できたことになる。

(2) 福岡市方言の「ゲナ」という形式に着目し、「伝聞の助動詞からとりたて詞的用法へ」という文法化現象が当該方言において生じていることを指摘した。

この研究ではまずアンケート調査を行い、ゲナのとりたて詞用法の使用状況を調査した。ここでわかったことは、主に福岡県筑前西北域の若年層において、その使用が顕著であるということである。特に福岡市方言若年層話者の一部は、ゲナを伝聞用法では用いず、もっぱらとりたて詞として用いており、方言文法研究において興味深い事例であると考えられる。

また、ゲナの取り立て詞用法成立のプロセスに関しても検討を加えた。その中で述べた変化モデルは、先行研究では様態用法から派生したとされていた取り立て用法が、引用マーカー的用法を仲立ちとして、伝聞用法から派生したというものである。

九州方言、就中福岡県方言のゲナの使用状況、および各用法間の類似性からしてもこのように考えた方が妥当であるように思う。

なお、研究開始時の主たる目的であった、複合辞形式の生成過程に関する考察については、研究期間内に十分な成果を上げたとは言い難く、この研究内容については引き続き今後も継続して研究を続けてゆきたい。

以上が、本研究期間中に成すことができた研究成果の概要である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 松尾　弘徳、福岡方言のゲナ－とりたて詞用法の成立をめぐって－、語文研究、107 号pp. 1-17、2009、査読有

② 松尾弘徳、因由形式間の包含関係から見た天理図書館蔵『狂言六義』、文献探求、46 号、pp. 130-144、2008、査読無

③ 松尾　弘徳、「日本語コミュニケーション技法Ⅰ・Ⅱ」実践報告－コミュニケーション能力の向上を目指して－、福岡女学院教育フォーラム、10 号、pp.1-13、2008、査読有

〔学会発表〕（計　３件）

① 松尾　弘徳、福岡方言のとりたて詞「ヤラ」「ゲナ」の成立をめぐって、第 222 回筑紫日本語研究会、2008 年 8 月 7 日、九重共同研修所

② 松尾　弘徳、福岡方言のゲナ-とりたて詞的用法の成立をめぐって-、第 87 回国語語彙史研究会、2007 年 12 月 1 日、大阪大学

③ 松尾弘徳、福岡市方言におけるゲナ、第 216 回筑紫日本語研究会、2007 年 10 月 20 日、九州大学

６．研究組織
(1)研究代表者

松尾　弘徳（MATSUO HIRONORI）

九州大学・大学院人文科学研究院・

専門研究員

研究者番号：４０４２３５７９